

**特集**

青森県立保健大学大学院健康科学研究科の現状と展望

健康科学研究科長 松江 一

1. はじめに

本学は平成11年4月に開学、平成15年3月に学部第1期生を輩出し、これに呼応するように平成15年4月には大学院健康科学研究科博士前期(修士)課程を開設、次いで平成17年4月には博士後期課程を開設し、平成20年4月には健康科学部に栄養学科が開設され、小規模ながら学士から学位まで一貫した高等教育機関として整備しえたのは、設置者である県当局および前および現学長の下、事務教職員が一致団結進めた成果と改めて関係各位に感謝する所である。

2. 健康科学研究科の構成

本学大学院の健康科学研究科の教育目標は「ヒューマンヘルスサイエンス&アートの探求-人間の健康に関する科学と技術の教育と研究-」であり、保健医療福祉分野における人間性豊かな研究者や教育者の育成、および豊かな人生を送るための高度な技術と知識を有する実践者を育成し、県内外のコメディカル分野で指導の人材を育成するものである。

大学院の構成は、学部の4学科の上に、看護学分野、理学療法学分野、地域保健福祉学分野、および生活健康科学分野の修士課程(定員20名、指導教員29名)と博士課程(定員4名、指導教員17名)からなる。

3. 健康科学研究科の現状と課題

各分野の紹介や特徴については、各分野代表者が詳細に述べたので、小生は現在の大学院健康科学研究科の現状と課題、特に「定員充足」について述べてみたい。表1と図1には平成15年度からの修士および平成17年度からの博士課程の入学人数の推移と、それに占める社会人入学者の割合を示したものである。

表1 大学院健康科学研究科の入学数の推移

		15年度	16年度	17年度	18年度	19年度	20年度
博士前期課程	入学人数	25	21	24	21	16	13
	(うち社会人)	21	13	15	16	13	6
博士後期課程	入学人数			6	10	10	4
	(うち社会人)			6	10	10	4

3-1. 大学院の入学数の推移について

大学院の修士課程と博士課程の入学人数の推移「表1、図1(A)および(B)」をみると、博士課程は順調に推移し、むしろ応募者が多くなるような傾向があるが、修士課程について見ると、平成19年度に定員をきり、平成20年も定員をきる結果になった。この原因について幾つか考えてみる。

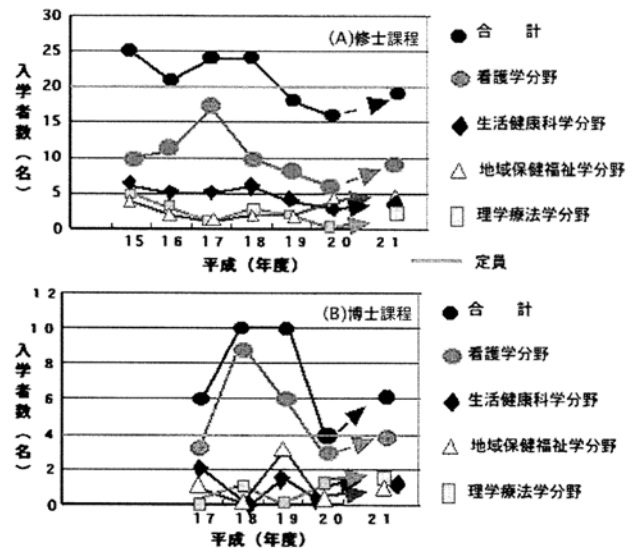


図1 本学大学院修士課程(A)と博士課程(B)の入学人数の推移

- 1) 図1からもわかるように、二つの課程ともに看護学分野が最も多く、本学研究科は看護学分野を主に構成されていることがよく解る。大学の規模から、本学の修士課程の定員は当初若干多めかなと思われていたが、地域保健福祉-看護関連分野および看護学分野の指導教員の方々が努力し、応募者を確保し、多くの優秀な修了者を送り出してきた。近年、若干看護学分野も応募者が下がってきたのは、本学に大学院ができれば入学しようと思っていた人が、一応一回り入学した結果と考えられる。次の目標は本学院生修了者が指導した後輩が入学することを切に願っている。
- 2) 地域保健福祉学分野、生活健康科学分野、および理

学療法分野の三つには大きな差はない。しかし、看護学分野も含めて一定の入学数を集めて健闘している分野の指導教員の方々には、ある一つの「地道な努力＝声がけ運動」が有ることも明らかとなった。

- 3) 反面、優秀な教員の多い理学療法分野が意外と少なかったのは、先程述べた「声がけ運動」がちょっと足りなかったことと、今一つには理学療法士の就業先に責任者のポストが少ないことも、大学院への入学の増加に結びつかないなど、特殊事情も有ることも明らかとなった。
- 4) また、本学の大学院が「社会人入学」が多いことは既に述べたが、学部卒業してストレートに大学院に入学する学生が極端に少なく、これまで看護学分野1名、理学療法学分野1名、生活健康科学分野が3名の計5名程に留まっている。
- 5) 本学は開学してから年月が少ないため、学部在学中の学生が大学院に対して具体的にイメージできる体制が構築されずらく、大学院の意義を実感し試験を受けて入学する学生は少ない。これとともに他大学の4年目の卒業生を、本学の大学院に入学させるには、研究科の各分野の指導教員が外部にどれだけアピールできる研究を行うかにかかっている。

### 3-2. 社会人入学について

少子高齢化が加速する一方で、「社会人入学」は大学院研究科の最重要課題であり、大学及び教職員は「講義、研究テーマ、研究内容、研究指導者、研究施設環境、及び図書館や事務手続きを含めた各種サービスが、如何に社会人にとって魅力ある大学院であるか？」が常に問われる。そのため、昨今の予算節約や省エネは大変重要ではあるが、「折角休みで来たのに研究が寒くて行えない」などは「本末転倒の面」も有り、我々指導者や教職員は「顧客満足度」の点から、常に真摯に院生や学生の声には耳を傾ける必要があるだろう。それと、本学教職員、学生、院生及び研究生には我々は青森県民の血税で研究や学問ができることに常に感謝の気持ちを忘れてはならない。

表1から明らかのように、本研究科の入学者は圧倒的に社会人が多いことである。修士課程では入学者のうち7割が社会人、博士課程では殆ど全てが社会人であり、考慮すべき幾つかの問題が浮かび上がっている。

- 1) 大部分の院生は講義やレポートなどで単位等を取することは、なんとかクリアーできるが、最も主になる修士論文や博士論文が修業期間内にまとまらない。
- 2) 古くて伝統のある大学院大学と、本学のような社会人の多い新生の単科大学の間では、「研究の技術や知の伝達」で大きく異なる点があるように思える。

前者ではストレートに修士に進学する数が圧倒的に多く、社会人入学者も常時研究室にたむろし、教授→准教授→講師→助手→大学院博士課程→修士課程→学部学生からなる「良い意味の知と技術の伝達のための徒弟制度」があり、ある一定のレベルと精度を持った人材育成と研究が競争的かつ協奏的に進められている。

- 3) この様な中、教授や准教授は大学院博士課程→修士課程の院生に、論文の読みかた、まとめ方、実験技術を伝達教育する指導課程が直接見聞されて、その内容が自然とスムーズにその下に伝達されるシステムが出来上がっている。そのような背景もあって今年度から導入した、修士および博士課程関連の中間および公開「発表会への院生の全員参加を義務化」したのは、ぜひ先輩たちの苦労や実績の上に本学の「良き伝統を築いて欲しい」との思いがあった(図2)。
- 4) 本学でも時々社会人入学者の中には、論文をまとめる基礎(研究テーマの決め方、研究を進めるための技術、論文調査、英文資料の読み方、研究のまとめ方、発表の仕方)を学んでいない人が散見される。その人たちが週末や夜にくると、講義や会議が多い指導教官の負担は益々大きくなる。しかし、本学の教員陣はその熱意に応える人材はそろっている。
- 5) 将来的には、静岡県立大学で行っている様な、教授一人に助手、又は助教、又は講師の二人で教育研究実習等を責任持って行う緩やかな講座制の確立が望まれる。
- 6) また、TV会議システム等を使用した講義等、遠隔地でも効率よく単位等が取得できる方法が欲しい。



図2 大学院研究科の院生発表会の風景

### 4. 健康科学研究科「定員充足および確保」の対策

これまで述べてきたように、「定員充足および確保」のための問題点は、ある程度明らかになり、なすべき事も明らかになった。

#### 4-1. 「声がけ運動」について

- 1) 先程も述べたが、本学でも比較的定員が充足している分野とそうでない分野では、教員一人一人の「声がけ運動」に差がある事がはっきりしてきた。そのため、今一度、研究科の指導教員を先頭に「声がけ運動」を行って頂くようお願いしたい。某大学は新聞切り抜き一面に大学院の募集広告を掲載したが、これは各自の研究費を削って実現されると考えられ、これに対して「声がけ運動」はゲリラ的でしぶとく確かな効果が見込める。
- 2) 即ち、学会、会議や研究会などの集まりを利用して、指導教員がさりげなく「大学院に来て私たちと一緒に研究をしませんか」、という一言勧誘活動が「応募者の背中をちょっと押す効果」があり、新聞一面広告に匹敵する効果があるということは、他大学からの聞き取り調査でも、最も強力な「定員充足手段」の一つである事が判明している。
- 3) 現在、修士課程の指導教員が29名いるが、その教員が一人院生を勧誘できれば定員はあつという間にオーバーしてしまうことになる。

#### 4-2. 「本学同窓生」について

- 1) 今一つは今年度で第六期生を輩出する本学の学部同窓生は総勢一千名近くになる。「本学同窓生」も社会人として独り立ちしてくる頃であり、その中から「もう一度、大学院研究科で研究や技術のアップを望む人」を察知し、如何に迎え入れるかであろう。そのためには同窓会の協力で「声がけ運動」をすることであり、同窓会の協力をせつをお願いするところである。気心が知れた師弟関係での研究教育はそのスピードも成果の上がり具合も早く、社会人の院生にも刺激的であろう。
- 2) 本学卒業生でストレートに本学修士や博士課程に進学する人を増やすにはそれなりに、「がん看護」、「リンパマッサージ」、「保健大学式リハビリ」、「地域食資源の動物試験」、および「健康寿命アップの食育」等のような魅力あるプログラムやコースを設定する必要が有るだろう。今のままだと、一旦社会人になって現場の経験を積んだ人の「学び直し循環システム」の一環で院生を受け入れることになるだろう。
- 3) 社会人になってからその職責を確保したままで、修士課程や博士課程に在籍する事は、如何に大変であるかは現在修学している諸先輩の涙ぐましい努力が物語っている。しかし、本学の卒業生であれば既に卒論も経験しているので事情は同じではないだろう。また、修士の学位を得ることに絞れば、ストレートに修士に進学した方が良いのは明らかであるが、

事情は単純ではない。

- 4) これについてはストレートに院生に残るメリットが何かを、我々も積極的に考え構築する必要があり、某大学では看護学分野の修士課程に助産学コースにおいて、修士と助産師を一緒に取得できるようにしている大学もみられる。

#### 4-3. 社会人のための「長期在学コースの設置」について

- 1) 社会人が研究科に入る場合、職場の理解のもとにきているものの、研究科に100%時間をさける院生は少なく、しかも職場では大変重要な働きをしている人ばかりで、その努力は大変なものに常に感服している。
- 2) 特に研究論文のまとめには、どうしてもあるまとまった時間が欲しいと以前から要望があった。
- 3) これについては他大学の調査を終え、中期計画でも22年度「長期在学コースの設置」を目指して準備を進めているところである。

#### 4-4. 遠隔地院生のための「TVによる e-learning」について

- 1) これについては、本学は東京および熊本の院生に対して行っていた実績があり、今回その熊本の院生が修了した。
- 2) 県内で最も希望の多く、予算の関係で多くの院生が見込める場所を選定したところ、現在、八戸地区を第一候補に「TVによる e-learning」システムの年度内設置を目指して進めている。

### 5. 青森県立保健大学大学院健康科学研究科の将来の展望

これまで「定員充足の取り組み」の視点から、本学健康科学研究科の現状について述べてきた。ここからは将来の展望や、大学・大学院の発展については述べてみたい。本学の健康科学研究科の将来展望については社会の動向を切り話しては考えられないであろう。

世の中にいつも二つの面が有ると感じている。それは本学のような国家試験のある「国試型」と「無国試型」大学や大学院である。本学の様な「国試型」大学や大学院は世の中の要請があつて作られるが、法制度が後を追いかけて来る様なところが有る。

- 1) その典型が看護学分野のNP(Nurse Practitioner、ナース・プラクティショナー)の話題であろう。NPは医師不足関連の話題で出てくる医療従事者の一つで、大学院において専門的な教育を受け、比較的安定した状態にある患者を主たる対象として、自律的に問診や検査の依頼、処方等を行うことが認められた看護師のことである。2008年4月に大分県立看

護科学大学大学院の博士前期課程において、老年及び小児のナース・プラクティショナーの養成教育が始められている。これについては本学リボウィッツよし子学長の最も得意とする分野であり、まずは看護学分野での煮詰まった議論を待ちたい。

- 2) 看護学分野では臨床現場での「看護実践技術、看護教育、それに臨床現場の患者の心理に関する研究」が多いが、将来、日本の看護学の研究が自然科学の最先端分野の研究技法を駆使し「世界の科学技術の進歩」に寄与する内容に、どこの大学の看護学分野の研究者が踏み込むか注目される場所である。
- 3) 応募者の項で、理学療法学分野や社会福祉学の応募者が今ひとつ伸びないことに言及したが、2010年には総人口の25%が高齢者になる社会を迎え、脳梗塞や心筋梗塞で倒れた人の急性期や回復期のリハビリテーション等、益々理学療法学分野の重要性は高まるのみである。
- 4) 社会福祉学分野も福祉のみでは経済基盤を作るのは大変であるが、元来福祉は人間に優しいという根本的な面を捉えた分野なので、高齢化社会における各種産業分野で、福祉の専門家の意見を取り入れた製品や、ケアマネや介護福祉の資格を有した、IT技術者、および自動車や電機会社の経営者が誕生する時代が来ており、10年後は経済的にも様変わりした社会の主役になるかもしれない。
- 5) 食はメタボや生活習慣病対策の根幹であり、生活健康科学分野で取り扱う、食の安全、食糧自給率、及び食産業における「栄養学の重要性」は益々高まっている。この様な時に「地域の健康寿命アップに食育や疫学の面」からや、「地域食資源の機能性素材の動物試験、人への介入試験、食品の開発」を通しての産業振興の要となる人材を輩出することが重要となっている。

## 6. 最後に

現在の様な不況下、「国試型」大学や大学院の修了者は、「無国試型」大学や大学院の修了者に比較して、就職状況等も良く、既に教育プログラムは大変良く整備されているので、そのような折にこそ、学部および大学院から生涯教育を含む一貫した高等教育に早くから取り組んだ大学、大学院と地域が最終的に大きなアドバンテージを得るだろう。

また、将来、若い人材の宝庫である青森県立保健大学が核となって、これに県立中央病院、もし可能ならば、養護老人ホーム『安生園』を附属施設としたり、大学に「健康外来診療科」を設置するなどして、これらが一体になった、「ヒューマンケアの教育、研究、高度専門職業に

関わる人材育成の循環システムが実現できる場」の構築が、この『北の大地青森』に実現できることを願うものである。